緑の牧場　51 号　巻頭言

牧師 森言一郎

故・脇本 寿　牧師　葬儀・告別式式辞

2023 年 2 月 25 日（土）午前 10 時

於；旭東教会

＊脇本寿先生ご紹介

元・旭東教会牧師（1959 年 8 月～ 1991 年 3 月）

誕生　1920 年（大正９年）11 月 29 日

召天　2023 年（令和５年）2 月 22 日（102 歳）

受洗　1938 年 5 月 8 日（倉敷教会 西田進牧師より）

【聖書箇所】

コヘレトの言葉　3 章 1 節～ 11 節

マルコによる福音書　1 章 14 節～ 15 節

ヨハネによる福音書　3 章 16 節

脇本寿さん、脇本牧師の告別式に際して式辞を語らせていただきます。寿先生の足跡にも触れながら、少しずつお話をさせていただこうと思っております。ふだん私は、告別式に際して、

説教題というものを特に明確に思い浮かべたり考えたりということはいたしません。しかし今、あえて申し上げるならば、脇本寿という方の、この告別式の式辞のタイトルは、『悔い改めて福音に生きる幸い』、そういうことになるのかなと思います。

もう一ヶ月前でしょうか、ご子息の脇本泰さんから、「先生、父の葬儀の相談をしたいのですが」と、夜の祈祷会が終わった後にお話がありました。それならちょっと座ってお話ししましょうかということで、明確に準備が始まったのですが、そんなことを思いながらお話をさせていただくつもりです。

数え方にはいくつかの方法があって一代違う数え方もあるようですが、脇本牧師は旭東教会の第 14 代の牧師であります。第 15 代が大賀牧師、16 代目が今井牧師、17 代目が指方牧師ご夫妻、そして私へとつながっているわけです。手元に『牧会手帳』という、日本基督教団から発行されている手帳があります。お葬儀の時にあ

るいは別の時にも見ることがありますが、最後のところに年齢早見表というのがあって、今年の生まれであれば 0 歳です。脇本寿という方は 1920 年大正 9 年のお生まれですから、この手帳は始まりが大正 11 年なので、もう使えない手帳、役に立たない手帳というわけです。

寿先生は大正 9 年にお生まれで、私はその 40 年後の同じ 11 月 29 日に生まれた者として、先生には大変親しい思いを持っておりました。今、手元に先生からいただいた年賀ハガキがございます。何人もの方におそらくこのお年賀を出されたのだろうと推測します。「頌春、ご一家の上に神の祝福をお祈りいたします。2023 年 1 月 1 日」と最初にあって、その後、いろいろ書いておられます。そして最後のほうに、「長い間のお交わりを感謝いたします」とあり、三文字分空けられて「さようなら」と書かれています。もう何年も「さようなら」と言い続けて、それでもお元気でいてくださった。

去年の恵老祝福の時であるとか、他のときに

もこの旭東教会の礼拝堂に姿を見せられて、場合によっては、ペンをとって私の話す説教を一所懸命にメモしておられるお姿が当たり前のようにずっとありました。先生は何を書いておられるんだろうと思ったり、もう勉強しなくてもいいんじゃないですかという気持ちにさえなりました。また、少し前までは大好きな自動車の運転も続けておられて、ご家族はご心配もあったということを昨晩お聞きしました。しかしそれよりも、「父にとっては本当に大好きだった自動車に触れさせてあげられて、それで心に翼を付けてどこかに行くことができていたのでしょうね、止めることはとてもできませんでした」と、ご家族はお話しされました。

　そのお元気な寿先生、大正 9 年 1920 年から一世紀生き抜くということは、並大抵のことではありません。同じお年の方で、ごく普通に電話もでき、あるいは何かしら相談もできるような 102 歳がどこにおられただろうかと思います。

　先生は、横屋家のお父様憲さん、お母様芳野

さんの三男として倉敷でお生まれになりました。高梁という地域が横屋家のルーツということになると伺いましたが、五男一女、五人の男のご兄弟と、一人の女のご兄弟の三男として生を受けられた。弟さん妹さんがそれぞれ、お一人ずつご健在であるということも伺っております。

寿先生は 18 歳の時、1938 年 5 月 8 日に倉敷教会で洗礼を受けるのですが、その土壌というか下地はできていて、キリスト教信仰に生きるご家庭でした。そしてその後に続く、豊子さんとの間に生まれてきたお子さん方、さらにそのお子さん、寿先生からすればお孫さん、そしてもう曾孫さん世代になり、やがてその先という時代がもうそこまで来ているわけです。ここで忘れないうちにお伝えをしなければいけないのは、そのキリスト教の信仰というのは、脇本さんたちご一家、その共にある皆さんにとっては、目には見えないけれどもかけがえのない財産であり、明確な強い意図をもって受け継ぐべき資産であり、永遠に消えない宝物なのだということです。

寿先生、「おじいちゃんはそのことは頼んだよ」と、「森先生、言い忘れてもらっちゃ困るよ」と、昨晩、私の夢に出てきたのではないかと思うほどに、これは絶対にお話をしなければならないことなのです。たすきを掛けられて、そしてまたそのたすきを渡して行くということは、大事な大事な皆さんの務めであるということを、言い忘れないようにするのが私の務めだと思っています。

お生まれになって 3 年ほどしたときに、倉紡というところにお勤めになっていたお父様のお仕事の関係で、香川県の坂出に移られました。その頃、川や池に落ちてもう死にそうになったけど生かされた、というようなエピソードもあるほど、やんちゃでもあられたようです。香川県でその後しばらくお過ごしになり、しっかり一番良い環境の学校なのだろうなと思われるところで学びをなさってお過ごしになった。ご兄弟がたくさんおられますからいろんなことがあったと思います。そこでいつしか揉まれて、や

がて出会われる一人っ子のお嬢さんである豊子さんとは全く違う環境の中で、多くの家族の中で生きるということを自然に身に帯びておられた。そのことは、その後の家庭を築かれていくこと、あるいは教会の人々との交わりの中で、実は重要な根っこになった何かであったと想像されます。

13 歳の頃、倉敷に移られます。そして、ご家族からいただいている寿先生の年表によれば、天城の中学に進まれる。その頃、倉敷教会に行かれていたのかはちょっと正確には分かりませんけれども、倉敷教会はご家族と深い関係にあったと思われます。年表には中学のことも書いてあり、岡山二中の 4 年生に転入して、そこでしっかりと勉強されました。

その頃は、岡山教会におそらく出入りされていたと思います。旭東教会の長老で 98 歳になられる栗原正さん、今日も一番後ろにちょこんと座っておられますが、岡山教会の少年倶楽部でしたでしょうか、そこで二人の青年の出会いが

ありました。後に同じ教会で、長年の信仰生活の旅路を生きて行くということは、想像できなかったことかもしれませんが、そういう素晴らしい出会いがあったのです。1938 年 5 月に西田進牧師のもと、倉敷教会で洗礼を受けられます。その時にもうすでに面識があったのではないかとご家族から伺っていますが、後に奥様になられる豊子さんも同じ日に洗礼を受けられたのです。それが 1938 年 5 月 8 日のことでした。単なる偶然とは思えない。お二人にとって、もうすでに何かしらの道が備えられていたのではないかと思わされるわけです。

　ところが、その後で当時としてはかなり絶望するような思いを抱かれたであろう重い病気にかかられます。のちに椎間板ヘルニアの間違いだったと分かるのですが、でもそれは決して軽いご病気ではなくて、折々にとても苦しまれたようです。当初は脊椎カリエスという難病で石のベッドに寝なければならないような大変孤独な病で、先行きが何も見えなくなるような状況の中にあったようです。

けれども神さまのお働きがありまして、1940年 昭和 15 年に同志社神学部に入学されます。自分のこの命は限られている可能性が大いにある、その中で与えられしこの命を賜物を、自分というものを、神さまの御用のために捧げ尽したいと思われ、生涯を神のために捧げようとされたのです。闇が時代を覆い、戦争が忍び寄る状況の中で、青年脇本寿さんは神学部に入学をされて、おそらくそこでまた素晴らしい先生方やお仲間たちとの出会いが与えられていたことと想像されます。

1943 年昭和 18 年には、半年繰り上げで 9 月に卒業するということになるのですが、時代は非常に目まぐるしく動き、太平洋戦争あるいは日本の言い方であれば大東亜戦争というような、その枠組みの中にすでにその身が置かれてゆく事情が生じていました。寿先生、1943 年 昭和 18 年に神学部を卒業され、恩師・田崎健作牧師がおられた弓町本郷教会、東京の中心地の伝統ある教会の伝道師に就任され伝道者としての第一

歩が始まりました。

当時の時代背景としては、昭和 17 年頃から、学徒勤労動員という労働力不足を補うために、中等学校以上の生徒たちが軍需産業や食料生産に動員をされていくということがありました。実はその学徒勤労動員ということの、宗教者版というものがあったのです。その分野のことについて大変詳しくお調べになっておられる方に、戒能信生先生と言われる方がいらっしゃいます。現在は日本基督教団千代田教会の牧師をされていて、長年、日本基督教団の宣教研究所の所長として日本のキリスト教の歴史を研究され、学ばれ、多大な尽力をなさった方です。その戒能先生が、牧師たちの勤労動員ということについてお調べになっているのです。

昨晩、その先生とやり取りをさせていただきましたら、大変詳しい資料（「戦時下の教会」⑳「牧師たちの勤労動員」戒能信生）をファクシミリでお送りくださいました。抜粋ですがご紹介します。

昭和 19 年の 4 月 19 日 1944 年 。その年に、宗教教師の勤労動員で、寿先生はその頃、横屋という記録でお名前が出てきますけれども、宗教者は宗教者としてその働きに仕えよということで、警視庁は「勤発(きんぱつ)1043 號通牒(ごうつうちょう)」を発令し、宗教教師の緊急勤労動員に着手します。「45 歳未満の男子教師は、官公吏、軍属、教職員、教誨(きょうかい)師(し)、保護観察所保護司、少年保護司の職に在る者を除いて、一応全部本動員の該当者」とされます。日本基督教団にも、厚生省勤労局長の通牒に基づいて計 203 名の徴用割当がなされました。さらに文部省において「戦時宗教強化方策要綱」が策定され、これが 8 月 8 日の閣議を経て発令されます。その要綱に「宗教家ヲ職場ニ動員シテ生産増強ニ挺身セシムルト共に、宗教強化ノ實(み)ヲ挙ゲシムルコト」とあります。

このような中で、昭和電工川崎工場に寿先生は弓町本郷教会から出向いていかれたのです。ご家族の中にはこういうパンフレット型の冊子を手にされた方もあるかもしれませんが、先生

は旭東教会を辞任された 91 年からほぼ 3 年後の 1994 年に、『朝鮮人強制連行とわたし　川崎昭和電工朝鮮人宿舎・舎監の記録』というご著書を、神戸学生青年センターのお力を借りて発行されています。何千部も出ています。そのことは実は脇本寿先生にとっては、非常に重要な意味をもつことになるのです。寿先生は、生涯牧師としてというか、人間として、と申し上げるべきでしょうか。あの頃、伝道者としてその勤労動員に就き、朝鮮半島出身の方々と出会います。寿先生は、次々と脱走して行く方々のお話を真摯に聴かれ、その立場に立って力添えをした。しかしながら、自分がやったことは本当に胸を張って「良いことをしました、正しいことをしました」と言い切れるのだろうか、ということを思うようになるのです。『旭東教会八十年史』あるいは、『旭東教会一〇〇周年 記念文集』にも、表現を変えながらずっと書いておられます。徴用されたご経験は、寿先生にとって、生涯つきまとう苦しみであり、苦いにがい思いを起こさせ続けるものでした。そのことに向き合わず、見て見ぬふりをするならば、自分は牧

師として生きて行くことはできないということだったのです。

　別な言い方をすれば、脇本寿という方は、平和を求め、平和を生み出すことを求め続けられたのです。平和によって生み出される平安がある、穏やかさがある、安らぎがあり笑顔がある、助け合いがある。違いを認め合って生きて行く者たちが、文化を超え、肌の色を超え、言葉を超えて一つになっていく。そのためにはどうしたらよいのだろうかということを、ずっとご自分なりに求め続けてきたということです。そしてそれが、戦後、じわりじわりと深まっていったということを申し上げなければなりません。

　やがて、川崎昭和電工朝鮮人宿舎・舎監としての働きが終わるのですが、戦争が終わってほっとした気持ちもあったのと同時に、心中複雑な思いを抱きながらお過ごしだった。朝鮮半島からの方々から「先生、朝鮮の解放を祝ってください」と言われ、何をどう喜んでよいか分からない、という思いの中にあったという文面も

読みました。

　そういう中で、脇本寿という人にとって、かけがえのない明るい光が差してきたことがありました。それが 1946 年に豊子さんとご結婚されたということです。1947 年には倉敷教会の伝道師に就任されます。その 2 年後に愛媛県の西条教会、伊予小松教会に就任される。西条の方にお暮らしであったわけですが、やがて最初のお子さんの泰さんが与えられる。そして 3 年後に恵子さんが、さらにその 6 年後に信（まこと）さんが与えられていく。その中で、伝道牧会が地に根付く形でなされていくわけです。西条という地は大変思い出深い地となります。お子さんの泰さんなどは、ものごころがついて行く年代であるわけです。

　やがて 1957 年に西条教会、伊予小松教会を辞任されます。その頃、椎間板ヘルニアの再発で大変苦しまれたそうです。倉敷で二年間の休みを取られながら、次なるご自身の伝道牧会の機会が与えられるのを待ち望む時を持たれたよう

です。ご家庭を築いていく上で色々とご苦労があったとのことで、お子さんたちは、日曜日だけは倉敷に集まってきて、それ以外は会えないような事情もあったと伺いました。

寿先生はその後、すでに歴史のあるこの旭東教会に着任をされるということになったわけです。この旭東教会の礼拝堂。今年で献堂 100 年を迎えました。寿先生が着任された頃は、礼拝堂の向きが今とは違っておりました。今私は、手元に旭東教会の書類倉庫から引っ張り出した、昭和 34 年度のひもで綴られた週報を持っています。ガリ版刷りで、1959 年 NO.33、8 月 30 日旭東教会週報とあります。その前の 8 月 23 日の週報は、斉藤道雄牧師による「旭東教会の敬愛する兄弟姉妹とお別れするときとなりました」というご挨拶があります。それに対して 8 月 30 日の週報には、寿先生がご自身のご挨拶を記されています。「斉藤先生の後を引継いで、歴史ある教会の務めをよりよく果たしたいと願っておりますが、大いなるおそれを禁じ得ません。しかし教会は牧師の一人相撲ではありませんで

教会員との共同作業です。信徒の生活の場がまた教会である事が新しく示されておりますが、信徒の持場は牧師に劣らず大切なものです。教会が社会に本当に触れるのは信徒の人々によってです。共に主の御栄えのために励みましょう。脇本 寿」

1959 年の夏に旭東教会にご家族で着任された時の様子を、ご長男の泰さんが旭東教会 100 周年記念文集に「旭東教会と私」と題して、こういう言葉でご一家の様子を伺わせる文章を記してくださっています。もちろん寿先生もそこにおられるわけです。冒頭の部分を読ませて頂きます。

「一九五九年八月の昼下がり、西大寺バスセンターに小さな人の群れがあった。彼らはバスから降りて来た人を迎え、バスセンターにある猿の檻の傍らを通り、日傘を差して道を東へと進んだ。やがて旭東教会の西の牧師の住まいにたどり着いた。ガラスの代わりにビニールを貼った質素な玄関の戸を開けると少し涼しい空間

があった。そこに立ったまま二、三人が感謝の祈りを捧げた。新しく赴任した牧師を迎えるために集まった旭東教会の信徒の方々であった。当時小学六年生であった私が初めて旭東教会と出会った日のことで、今でも昨日のことのように覚えています。･･･」

正にそこから、脇本寿牧師が本当に腰を据えて 31 年に及ぶ伝道牧会をしっかりとしてくださって、今の旭東教会があると断言ができるのです。最初から予定されていたわけではありません。常に限界を抱えながらであったと思いますが、そこで大事な旭東教会の皆さんとの歩みが始まり、仕えていかれたのです。

そして、今日も岡山キリスト者平和の会の代表である難波幸矢さんがお出でになっていますが、寿先生は、岡山キリスト者平和の会の代表としても、32 年間ご奉仕されました。正に先ほどの、痛みに感じ責任を感じて自分に託されたことがあるのだという使命を明確に抱きながら、その重荷を負われたのです。こつこつと勉強会

をし、励まし合い、祈りを合わせ、夏には特別な礼拝を持ち続けるということをなさったわけです。

旭東教会の皆さんは、今日コロナの事情で、表通り側の集会室におられます。脇本先生にご家族がお葬式をしていただいた、結婚式をしていただいた、洗礼を授けて下さった、もうその数は数え切れないぐらいです。

70 歳近くなって、寿先生と豊子夫人との間に、「そろそろ自分の身の引き際を考えている、もうここまでいいかな」、「もう十分がんばったわよ」という会話があったそうです。その時まで、二人三脚一心同体で、旭東教会のために、当たり前に全力を尽くされた。柔和にまた温和に、そして年輪を重ねる中で、居てくださるだけでも安心であると皆が思った。今日のご家族からのご挨拶のお礼の品にカードが挟まっているはずです。そこには、5 年ほど前の平和聖日の午後、寿先生が旭東教会の礼拝堂でお話をなさっているときの写真があります。ダンディな

んですね。おしゃれです。90 代半ばのおじいさんが、こんなしゃれた白いブレザーを着て、かっこよく教会にやってくるなんてありえないわけです。最後までかっこいい寿先生、その先生のもとに多くの方たちがおいでになり、お話を聞いていただいたのです。

しかし、旭東教会でのお働きの締めくくりの時期に、思いがけない大きな悲しみが襲いかかります。それが豊子夫人の本当に重いご病気です。その病気の進行の速さには手立てなしということで、皆さんが力を尽くして祈りを合わせて、神はどこに居るんだという思いの中でお過ごしになった。けれども、その祈りのかいなくというのか、祈りは聞かれていたけれども、なかなか受け入れ難い現実が起こった。寿先生にとってもそれから先 30 数年の人生があったわけですから、それは正に他の誰にも想像できないほどの嘆き、涙の時でありました。豊子さんのご病気が分かった時、信さんが寿先生がご兄弟に泣きながら電話をしている姿を見たそうです。そのような父の姿を見たのは初めてだったと、

昨夕、納棺式のあとに仰っていました。

寿先生は、イエスさまが一番最初に語られたことを、深く心に留めておられたと私は確信しています。今日お読みした聖書の中に、マルコによる福音書があります。その 1 章 14 節から 15 節にかけて、「悔い改めて福音を信じなさい」とありました。

私がご家族から手渡していただいた記録を見ると、東中国教区の社会委員会の働きにも本当に一所懸命に仕えられ、旭東教会のことだけでなく、東中国教区という、岡山県と鳥取県の 50 余りの教会伝道所の働きのためにも仕えられました。教区の役員として、書記を 7 年間なさり、その後、教区総会議長としての重責を三期六年間負われたのです。牧師としての最後の時代のお働きです。 寿先生、ご自分でこういう趣旨のことを書かれています。「研修会もした。礼拝の守り方、社会的な責任、伝道方策、伝道集会の持ち方等々、「試行錯誤」した」と。そして、その最後の方に、「三十年の半分以上、教区の

仕事に追われ、また自分の信仰と能力の不足のため、十分な行き届いた牧会ができず、一人一人の魂まで届かず、悔いの多いことを教会の主と教会の皆様にお詫びいたします」と書かれています。隠退後、二代にわたって牧師が着任した後のことです。「私はふつつかな僕です」（口語訳）とルカの福音書 17 章 10 節にありますがそれを引用されている。「すべきこともできませんでしたと主にお詫びいたします」と記して終わっておられる。

　これは、本当に心からの悔い改めがないと、普通はできないことです。自分の力及ばずのこともあり、足りないこともある。これでよかったのだろうかということを言葉にする。真摯にごめんなさいと言われている。これは、イエスさまの赦しを信じ、その愛に生きる人として、本当に生かされている人のお姿です。そしてこれは、ある意味で残されている一人一人へのメッセージなのです。「ごめんね」とは、大きなことで言えば戦争のことについてかもしれません。本当に申し訳なかったと。「兄弟喧嘩であ

れ、些細なことに過ぎないと思われるようなことであっても、ごめんねと言える生き方をしようよ。僕はそのことをみんなにお願いするよ。イエスさまはそう言える人を愛してくださっているし、赦してくれているし、大事にしてくれている。そのことこそが平和を生み出して行くかけがえのない希望の力なんだよ」と言われている。そのように伝えてくださっているように思えてなりません。 悔い改めて福音を信じる幸いがある。

ご家族の皆さん、教会の皆さん、あるいは共に生きてこられた皆さん。私たちは確実にたすきを渡されたのです。聖書に描かれているイエスさまのこと、神さまのことやその愛を思い、賛美歌を歌うのです。

ここに『脇本寿　愛唱讃美歌集 2020 年 11 月 22 日』という冊子がございます。百歳のお祝いの時、ご家族が作られたものです。その際、神戸に「行ってきいます」というお話を聞いて、私は、「舞子ビラ神戸かぁ、いいな」と思って

うらやみました。それはね、本当に幸せな時ですよ。ありえない。ついこないだも、何かのお祝いをなさったかもしれませんが、みんなで歌おうよというこの賛美歌を、みんなで歌い続けてください。なかには頑固者もいて、俺は教会へいかん、ということもあるかもしれませんが、今日はおじいちゃんの顔をしっかり見直してください。何が聞こえてくるかな。一緒にこれからも賛美歌を歌っていきましょう。聖書に聴きましょう。イエスさまの道を生きて行きましょう。天国から寿先生、豊子さん、ニコニコの笑顔が、また涙が、こぼれ落ちてくるのではないでしょうか。お祈りいたします。

【祈祷】

　全てのものの造り主、私たちの主なる神。脇本寿、その命をあなたは生まれる前から慈しみ、一世紀を超えるそのご長寿でそれ祝してくださいました。主と共に足跡を残し、またこれからの道を示してくださり、立ち返るべきところに立ち返ること。担うべき重荷を負って誠実に忠実に生きるとは何であるか。福音に生きるとは、

クリスチャンとは何であるのか、人間とは何であるのかをご一緒に考える時をこの告別の時に新たにもたせていただきました。心から感謝いたします。主のあたたかな光がこの御堂に差してきます。あなたの光が集いし者、集い得なかった者の心に、また破れ口に、あたたかく差して沁みてきます。感謝いたします。涙があります。沈黙があります。しかし、ほめ歌を歌わせてください。また悲しみも分かち合わせてください。沈黙も分かち合わせてください。苦しみも一緒に負わせてください。そして、もう一度気づいたことがあるならば、悔い改めて立ち位置をもう一度見つめ直し、方向を向き直して主イエスの道を生きて行く覚悟をもたせてください。あるいは、それをさらにバトンタッチして行くことができるものにならせてください。お一人お一人の祈りに合わせて、み子イエスキリストのお名前によって、この祈りをみ前にお捧げいたします。アーメン